

「神が私たちの味方であるなら」

ローマ人への手紙 8 章 31-34 節

「では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。

だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。

だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

ローマ人への手紙の冒頭、パウロは、「神の福音のために選び出され」、使徒として召されている(1 章 1 節)と語り出します。1 章 15 節においても「ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです」と、福音、良き知らせを伝えるためにこの手紙を書いているというのです。

パウロは別の手紙、テモテへの手紙第二ではこのようにも言っています。

テモテへの手紙第二 2 章 8 節

「イエス・キリストのことを心に留めていなさい。私が伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえった方です。」

パウロの教える福音はイエス・キリストです。福音の中心である「イエス・キリストのことを心に留めていなさい。」と言われます。そして、私が伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえった方です。と言われます。

今年も、アドベントを迎えました。クリスマスに、ダビデの子孫として、そして、私たちの救い主としてお生まれになった、イエス・キリストを心に留めつつ、パウロの語る福音のメッセージに心を向けたいと思います。

パウロが語る福音とはなんでしょうか。まずパウロは 3 章ではっきりと言います

「義人はいない。一人もいない。」(3 章 10 節)。すべての人が罪人であるというのです。私たちは生まれたときからの罪人であります。罪人として生まれた私たちです。

しかし、それで終わりではなく、パウロは語ります。

5 章 19 節。「一人の従順によって多くの人が義人とされる」。

私たちは何とかして正しい人になるのではなく、どんなことをしても正しい人になることはできないけれども、私の力ではどうにもできないけれども、唯一私たちが義人となる道があるというのです。

その道は、「一人の従順によって多くの人が義人とされる」ということなのです。

私たちが義とされる道があるということです。すべての人は罪人であり、神に逆らい不義を行っています。

しかし、「一人の従順によって」、つまり、イエス・キリストの従順によって私たちは義人とされる道があるのです。イエス・キリストが義人であり、そしてイエス・キリストを信じる者に神の義が与えられるということです。

パウロは、私たちはアダムの子孫であり、アダムの罪を受け継いでいると言います。アダムとエバがエデンの園で、神様との約束を破り、罪を犯したのと同じように、私たちも同じ罪人として生まれ、私たちは神に逆らい、すべての人が罪を犯しています。そして罪を犯している、すべての人が死に定められているのです。

しかし、イエス・キリストの従順によって、神に従うイエス様に私たちが信仰によってつながることによって、私たちの罪は赦され、神の義と永遠のいのちにつながるのです。

すべての人間がアダムの墮落から生じた罪深い状態を受け継いでいますが、イエス・キリストを信じる者はイエス・キリストの従順によって主なる神様が与えてくださる恵みと平安と喜びにあずかることができるのです。

罪深く、そして死に定められた私たちの救い主として、イエス・キリストは生まれてくださったと信じる者たちは、信仰によって与えられる新しいいのちを生きることができます。もはや「罪の奴隷」から解放されて、「義の奴隷」として生きることができます。これがパウロが語る福音です。もはや私たちは、私たちをさばく律法の下にではなく、私たちの罪を赦し、いのちを与える神の恵みの下にあるのです。

パウロは言います。

ローマ人への手紙 6 章 14 節。

「罪があなたがたを支配することはないからです。あなたがたは律法の下にではなく、恵みの下にあるのです。」

以前の私たちは完全に罪に支配されていました。罪にまみれていました。罪に束縛され、主なる神様に背き、悪を企み、悪を行い、何をしようとしても的外れな、間違ったことを考え、正しいことが何もできませんでした。

パウロも罪ゆえに苦悩していました。

ローマ 8 章 18 節 20 節

「私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。」

私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。」

私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。」

私たちもパウロの告白と同じように、良いこと、正しいこと、主なる神様が願っておられることをしたいという願いがあっても、それができない自分があることを、認めざるをえないのではないのでしょうか。

日々の生活の中で、いつも自分のことを中心に考えてしまう。人のことよりも自分のため、主なる神様を忘れて、自分が神のようになってしまう。気が付けば自分がしたいと思うような良いことではなくて、どうしても自分勝手に悪を行ってしまっている。

「私のうちに罪が住んでいる」と告白し、そしてもはや自分の力ではどうしようもできないと、罪に対して無力であると、認めるしかありません。

しかし、パウロは「義人はいない。一人もない。」と絶望するのではなく、希望を見出しました。罪に束縛された人間は、イエス・キリストによって、罪の束縛から解放され、自由といのちを受けられることができると、唯一のそして完全な解決策を見いだしたからです。

ローマ人への手紙 8 章 1 節

「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

8 章において、パウロは将来の審判、さばきについて思いを巡らし、神に選ばれ、救われた者たちを訴えるのは誰かと問います。

しかし何があったとしても、イエス・キリストが我々のため救い主としてお生まれになり、私たちの罪を背負ってくださり十字架で死なれ、そして復活をされたイエス様が、今私たちのためにとりなしてくださるという事実を考えれば、訴える者は誰もいない (31-36 節)。という結論に至ります。

パウロは確信して言います。

ローマ人への手紙 8 章 37-39 節

「しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、

高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

パウロがこの手紙を書いた時代、1 世紀半ばのローマは、地中海沿岸地域において政治、経済、文化の中心地でありました。多様な民族と思想が共存し、皇帝崇拝、多神教、異教的な文化が蔓延していたのです。そのようなローマには、パウロ訪問以前からユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンからなる教会がありました。

パウロが伝道旅行においてほかの教会で会ったことのあるクリスチャンが、今はローマに住み、その教会の一員になっていたのです。

私達もローマがそうであったように、政治、経済、文化が発展した時代に生かされています。同時に多様な思想があふれ、まことの神を信じることをせずに、経済が中心、人間中心の世界に生かされています。そのような中で、私達はもう一度パウロが教える福音とそしてイエス・キリストに目を向けたいと思うのです。

私達はイエス・キリストに愛され、罪から救われ、新しいいのちに生かされている。その確信を持って、いまこの時代、私の人生を生きる者でありたいと思います。

1. 神が私たちの味方であるなら（召し）

ローマ人への手紙 8 章 31 節

「では、これらのことについて、どのように言えるでしょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」

パウロは自問し、「神が私たちの味方である」と、確信を持って答えています。

「では、これらのことについて」、と言います。パウロがこれまで手紙の中で語り続けてきた福音が前提となっています。直前の 30 節ではこう言われます。

ローマ人への手紙 8 章 30 節

「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました」

パウロは、全人類を救ってくださる神の恵みのみわざを語っています。神はあらかじめ定め、召し、義と認め、栄光を与えるお方であるということです。これらすべての主体は神様。人類の救いは神様がなさることです。そしてすでに確実に起こったこととして語られています。それほどまでに救いのみわざは確かなことなのです。もうすでに定まっている。神様は私たちに栄光を与えてくださると約束してくださっているのです。

「神が私たちの味方である」と言われます。永遠の昔からそのご計画の中で、私達を愛し、キリストの十字架と復活によって私達をご自身の支配の下に置き、終末の栄光の時まで守り続けてくださるということです。これまでも、今も、そしてこれからも、神は私たちの味方であるのです。

そのような私達に「だれが私たちに敵対できるでしょう」か。誰も敵対できないのです。私達は弱く、どんな力にも負けてしまいます。悪の力にも、どんな誘惑にも。しかしどれほど、自分が無力であっても、神が見方をしてくださるのです。そして私ではなく、主なる神様が勝利をされるのです。

神が私たちの味方であるなら、だれも私たちに敵対できないと確信をもって答えることができます。

自分の行いや、自分の意思や、自分の能力や、自分の可能性ではなく、私の力を超えて、私の思いを超えて、私の理解を超えた、偉大な神のご計画に対する絶対の確信の表現であります。

神が私たちを愛し、選び、召し、義とし、われわれに栄光を与えるというのならば、だれがわれわれに敵対して立つことができるだろうか、いや、誰も敵対できないと確信を持って答えることができるのです。

神様は確かに私たちを導いておられます。そして私たちは信仰によってそのことを知ることができます。神様が導いてくださり、そして私たちはその道を進んでいくのです。神様は罪を犯したアダムに声をかけられました。

「アダムよ、あなたはどこにいるのか」神様はアダムがどこにいるのか分からなくて声をかけたわけではなかったでしょう。そうではなくて、神様はアダムを救い出そうとされたのです。アダムを導こうとされたのです。そしてアダムの応答を期待していたのです。

しかし、アダムがそうであったように私たちは隠れてしまったり、逃げ出してしまったり、神様について行こうとしないのです。

しかしそれでも、神様は私たちの味方であり、救いの道を備えてくださっているのです。神様が私に声をかけてくださるのです。私の名前を呼んで声をかけてくださり、この私を救おうとしてくださり、導きだそうとしてくださるのです。

暗闇から光へと道いてくださるのです。私たちを暗闇へと導こうとされる力があります。私たちの罪の力であり、悪の力です。

しかし私たちは、「あなたはどこにいるのか」という主の声を聞くことです。そして「私は間違っていた。間違いを犯した」と、自分の間違いと罪を認めて、主が導く道こそ正しいと、悔い改めることができるのです。

自分の思う通りに、自分の人生を生きるのではなく、主の言葉を聞き、主に導かれて、主の道を歩み出すことができるのです。そして私たちの人生が変わります。

主は私たちを助け出そうと、声をかけて、連れ出し、導いてくださるお方です。救い出してください、救い出し、それから守り、導き、恵みを与えてくださるお方です。

第一ペテロ 2 章 10 節

「あなたがたは以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。」

私たちは、自分の道を進んでいるときは、不安でありました。不安を隠すようにして、ごまかしながら、自分なりの人生を生きてきました。

しかし私たちは、救い主としてお生まれになられたイエス様と出会うとき、喜びに満たされます。隠すのではなく、ごまかすのではなく、自分のすべての罪を告白し、自分の無力さを認め、ただただ神の愛にすがり、あわれみを受け取るとき、すべてを主にゆだね、そして救いを確信し、喜びに満たされるのです。それが福音であり、信仰です。

そして私たちは救い主イエス・キリストとつながるのです。

コリント人への手紙第一 1 章 9 節

「神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。」

イエス・キリストと交わる私たちには全てが与えられます。

2. 御子とともにすべてのものを（義認）

ローマ人への手紙 8 章 32 節

「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」

「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神」は私たちの味方となってくださる神です。主なる神様は「惜しむことなく」、私たちに救い主、御子イエス・キリストをお与えになりました。

パウロが神について用いている言葉は、アブラハムに対して神が用いられた言葉でもあります。神はアブラハムに「あなたはわたしのためにひとり子をも惜しまなかった」（創世記 22 章 16 節）と言われました。アブラハムは愛する息子以上に、神を愛したのでした。それはすべてを神にささげる、神に従い、神のために生きるというアブラハムの信仰の現れでした。

しかし、信仰の父アブラハムでさえも、実際に我が子をささげることはありませんでした。神にとっても、そのひとり子を人間の罪のために十字架につけることは、耐えられないほどの苦しみであったはずで、御子を十字架の死にまで引き渡されたということは、いっさいが私たちのために与えられたことを意味しています。

私たちのために御子をこの地上に遣わし、「死に渡された神」がおられます。「死に渡された」というのは、神のさばきを表わすことばでもあります。私たちが私の罪ゆえに受けるべきであるさばきをイエス様が代わりに受けてくださったのです。

アブラハムが息子をささげ神への愛を現わしたように、主なる神様は御子イエス様をささげ、私たちに対する愛を現わしてくださったのです。私たちのために何でもする。私たちにすべてをささげてくださる。罪の赦しを与え、そして新しいいのちを与え、私たちの人生を、主なる神様の全てをもって祝福してくださるのです。主なる神様の大きな愛があります。

イエス・キリストの十字架に現わされた、神の愛こそ、信仰者の確信を確実にするものです。神はそれほどまでに私たちを愛しておられるので、御子と共に全てのものを私たちに与えてくださるの
はずで、これがパウロの論理であり、私たちの信仰の確信です。

ローマ人への手紙 5 章 6-9 節

「実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。

しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。

ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

私たちは信仰によって確信することができます。神様が私たちを愛してくださっているならば、すべてを与えてくださるというのならば、イエス・キリストを与えてくださったのならば、私は救いを確信し、喜んで生きることができるのです。

100 歳のアブラハムは、肉体の力が衰え、将来の希望も無いようなそのような状態で、むしろ信仰が強められて、神は約束したことを必ず行ってくださると確信していました。

アブラハムは、「あなたの子孫を空の星のように増やす」と語られ、どうやったらそんなことが起こるんだと、理解ができないことでありましたが、主なる神様がそのように語られるならばと信じたのです。

私たちが神様の約束を信じるとは、自分の力では何もできないけれども、もう何も望むことはできないけれども、しかし、主なる神様は約束してくださるならば、きっとそうなるだろうと信じることです。

その信仰さえも神様が与えてくださるのです。アブラハムの人生の全てが主の導きの中にあり、主の力によって支えられ続けてきたのと同じように、主なる神様が私たちの人生に必要なすべてを与えてくださるのです。主にすべてを任せて生きる。そのような生き方が神に義と認められた者の生き方です。

3. とりなしていただく (栄化)

ローマ人への手紙 8 章 33 節

「だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。」

「訴える」とは、告訴するという意味で、神のさばきの法廷を思わせることばです。未来形であり、将来の裁きについて言われているようです。しかし神に選ばれている私たちは訴えられることは決してありません。

「神に選ばれた者たち」、「神が義と認めてくださる」、「神が、神が」と、強調されています。私が、あなたが、自分が、ではなく「神が」なのです。「神が私たちを選び」、「神が私たちを義とされる」のです。

神との正しい関係または関係の回復を意味しています。「イエス・キリストを信じる信仰によって義と認められる」(ガラテヤ 2 章 16 節)、それは罪の中から救い出され、神と正しい関係に招き入れられることです。神が私たちの味方として、いつも共にいてくださり、私たちも共にいてくださる神に心を向けることです。

ローマ人への手紙 8 章 34 節

「だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

「だれが、私たちを罪ありとするのですか」、罪ありとは、有罪の判決を下すことです。しかし、誰も信仰者たちに有罪判決を下すことはできません。

「死んでくださった方、いや、よみがえられた方」、救い主イエス・キリストが成し遂げてくださったみわざと、まさに今天において生きておられるイエス様がとりなしてくださってるみわざのゆえに私たちは罪に定められることがないのです。

2000 年前のクリスマスにお生まれになられた、イエス・キリストは、あわれみ深い偉大な大祭司として、ご自身をいけにえとして、傷のないものとして神にささげられただけでなく(ヘブル 9 章 14 節)、三日目によみがえり、神の右の座に着き、大祭司の務めをしているのです。

これが福音です。良き知らせです。

『ハイデルベルク信仰問答』の間 49 に「キリストの昇天は、私たちにどのような益をもたらしますか」という問いがあります。

その第一の答えは「この方が天において御父の面前で私たちの弁護者となっておられる」という答えです。天の父なる神は、罪に対しては激しくお怒りになるの審判者であります。しかし今、救い主イエス・キリストが私たちのためにお生まれになり、天におられます。

滅びるばかりの罪深い私たちのために命をささげて償ってくださったお方が、神の右の座に着き、大祭司の務めをしているのです。地上にお生まれになり、私たちの人間のすべての苦しみ、悩み、病、全ての私の罪をご存じのお方が、すべてを背負って、私の味方となり、今このときもとりなしてくださっているのです。

救い主イエス・キリストを信じ、義とされた私たちは、イエス様のとりなしの中で、生かされています。その人生は祝福へと至る人生です。さばきではなく、永遠のいのちをいただく人生です。罪人であった私たちは、罪赦され、そしてきよめられ、永遠のいのちをいただくにふさわしい者へと造り変えられている最中です。私たちのその歩みの中にとりなしてくださりイエス様がおられ、導かれているのです。

パウロは言いました。「イエス・キリストのことを心に留めていなさい。」「神が私たちの味方であるならば、だれが、私たちを罪ありとするのですか。」「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

イエス・キリストのことを心に留めて、アドベントを過ごしたいと思います。